

問題

次の文章を読み、あとの問に答えよ。

(50点)

問一・対比

支簡亭謂、「引年難矣、但可引年。引年者、於所稟之外、欲引而長。」

非神仙不能。若尽年者、直是於所稟之内、不中道夭。至期而終。此則清

心寡欲之人、能之矣。」余以此言語、对溪曰、「引年尽年、非有二道。年既

可尽、尽之由我、則亦可引、引亦由我。」余曰、「誠然。若清心者、清之又

清、至於無心、寡欲者、寡之又寡、至於無欲、豈有不能引年之理。」故人患不

能無心、不能無欲、不患不能引年。」蓋余官長洲、好事之家、買福建茉莉為

玩、每至冬月、其樹枯死、明年又買。余一日至寒山寺、其僧、出茉莉一盆、開

花数十朵。余問、「此花今年買得者耶。」曉山曰、「已十年矣。」茉莉也、長洲每年所買、

不下二万株、而皆死、而曉山一株、独歷三十年而活。活至数十年、未可知也。夫草木

チェック

問一 対比關係を押さえる  
「引年」⇔「尽年」

問二 対句表現に着目し省略された語を補う

問五 文章全体の趣旨を押さえる

問四 多義的な漢字の意味を文脈から適切に判断する

**注**

\*支簡亭・対溪・暁山ニともに、人の名。 \*長洲ニいまの江蘇省蘇州市。 \*福建茉莉ニ南方の福建産のジャス

ミン。 \*寒山寺ニ蘇州城西にある寺。

問一 傍線1とあるが、支簡亭は「<sup>レ</sup>年」をどのようなことと考えているか、説明せよ。(11点)

問二 対溪は傍線2と言うが、なぜそのように言うのか、簡潔に説明せよ。(9点)

問三 傍線3をわかりやすく口語訳せよ。(11点)

問四 傍線4をわかりやすく口語訳せよ。(11点)

問五 傍線5とあるが、筆者は、人間が「年を引く」ためにはどうすればよいと考えているか、簡潔に説明せよ。(8点)

問一  
解答要素を意識し、  
それぞれに適切な字  
数を割く

問三  
句形や目的語といっ  
た文構造に着目する

問五  
漢文の典型的な展開  
を踏まえて読む

**出典**

明・江盈科（じやうえいか）『談叢』

江盈科（一五五三～一六〇五）は明の政治家。字は進之。長年科挙に合格できなかったが、四十歳ころになってやっと合格し、そこから政治家としての道を歩むことになる。科挙に合格する前から文人とし

てはそれなりに名の通った人物であり、また合格後も、同時期に科挙に合格した袁宏道を中心とした文学運動の一翼を担って活躍した。

## 解答

問一 心が清く欲の少ない人ならば実現可能な、天与の寿命を最大限に生きること。

問二 引年も尽年も自分の心がけ次第である、という点で同じだから。

問三 だから、人は無心・無欲になれないことを憂え、寿命を引き延ばせないことを嘆かないのだ

問四 同じジャスマンなのに、長洲で毎年買う一万株以上のものはすべて一年で枯死し、暁山の一株だけが十年たっても生き続けている

問五 無心・無欲に生きればよい。

## 解説

## 今回の文章の概要

今回はやや長めの主張文。前半が他者の言葉の引用と対話で成り立ち、後半は筆者の経験談という、一風変わった構成である。

**A** 【話題提示】支簡亭の言葉を引用して、「引年」と「尽年」の話題を提示。(ℓ1～3) (↓問一)

**B** 【話題展開】**A**を一部否定し、発展させた対溪の言葉を紹介。(ℓ3・4) (↓問二)

**C** 【主張】それを受けて筆者が自説を述べる。(ℓ4～6) (↓問三)

**D** 【例示】自説を補強する根拠として、筆者の経験談である「茉莉」の例を語る。(ℓ6～9) (↓問四)

## E

【結論】「茉莉」の例と「引年」を結びつけて結論づける(ℓ

9・10) (↓問五)

☑ 対比関係を押さえられたか

☑ 解答要素を意識し、それぞれに適切な字数を割けたか

問一 「引年」と「尽年」の定義そのものについては、支簡亭の見解も対溪・筆者の見解も違いはない。まずは、「引年」と「尽年」がどう違うのか、それを最初に押さえる必要がある。支簡亭の言葉の中から整理してみよう。

- ・ 引年⇨稟くる所の外に於て↓引きて長くせんと欲す
- ・ 尽年⇨稟くる所の内に於て↓中道にして天せず、期に至りて終はる

両者に共通する「稟くる所」とは、(天から受けたもの)の意であるが、この文章は後半のジャスマンの例からわかるように、寿命についての話だから、**天が定めた命・寿命**と理解しておけばよい。そうすると、「引年」は天の定めた命の「外」に年を引く、つまり、定められた命そのものを引き延ばそうとすることで、これは神仙でない人間が行えることではないから、支簡亭は「年を引くは難し」と言うのである。

それに対して「尽年」は、定められた命の「内」、つまり範囲内で、

中途で夭逝（てうせい）（＝早死に）せず、一定の時期（＝天に定められた死期）に至って命を終えるということとで、**〈定められた命を使い尽くす・天与の寿命を最大限に生きること〉**と言ひ換えてよい。しかし、これは誰もができるとは限らない。支簡亭は、「此れ則ち清心寡欲の人にして之を能くす」と考えている。解答欄の大きさから考えても、「**「尽年」の説明については、〈心が清く欲の少ない人であれば実現できる〉**ということも書き落としてはならない。

☑ 対句表現に着目し省略された語を補えたか

問二 傍線部は、「引年」「尽年」には、二つの道があるのではない」という意味。「道」は、「道理」と理解しても「方法」の意味に取っても、どちらでも通じる。要するに、対溪は「引年」「尽年」には同一の要素がある、と考えるのである。それは、傍線部に続く「年は既に尽くすべく、之を尽くすは我に由るとせば、／則ち／亦た引くべく、引くも亦た我に由る」という言葉からうかがえる（「／」でポイントを区切ってある）。ポイントごとに訳し方を見ていこう。

■ 本文を分解して確認

・「則ち」

中間にある「則」は、一般的には「レバ則」と呼ばれ、〈……であるならば、そこで——〉というように、上文の条件を下文に接続する役目を果たす。

・「年は既に尽くすべく、之を尽くすは我に由るとせば、」

（年は尽くすことができ、（そして）年を尽くすのは自分によるとするなら）という意味。「既」は、訳す必要はないが、確定のニュアンスを示すもので、これは「引年」は神仙でない限り不可能だが、「尽年」は清心・寡欲の人なら可能である」という、支簡亭の認識を承けている。

・「亦た引くべく、引くも亦た我に由る」

省略された主語と目的語を補うと、「年亦可引、引之亦由我」となる。上文の反復の形だ。「亦」は〈……もまた〉という意味で、下文が上文と同じであることを示す。そうすると、下文は〈年はまた引くこともでき、年を引くのもまた自分による〉という意味になる。つまり、「尽年」と「引年」とは「我に由る」、すなわち**〈自分の心がけ次第〉**という点で同一なのである。**〈引年も尽年も自分の心がけ次第である、という点で同じだから〉**などと答えるとよい。

ところで、「我に由る」ということの具体的内容は、どうということか。支簡亭の言葉によれば、清心・寡欲に生きる（かどうか）という点とであり、対溪の考えに賛同する筆者の言葉によれば、無心・無欲に至る（かどうか）ということとであり、どちらにしても、自分の心がけ次第なのである。

☑ 句形や目的語といった文構造に着目できたか

問三 傍線部は、「故に人は無心なる能はず、無欲なる能はざるを患へ、年を引く能はざるを患へず」と訓読し、「故に人は」以下が「A・Bを患へ、Cを患へず」という構造になっている。「患」は、〈憂える・心配する・悩む〉意。無心・無欲の境地に至れば「豈に年を引く能はざるの理有らんや（＝どうして寿命を引き延ばすことができない道理があるのか、いや寿命は引き延ばせるのだ）」という上文の流れを押

さえて傍線部を考えれば、それほど迷う部分もないだろう。ここでは、**〈だから、人は無心・無欲になれないことを憂え、寿命を引き延ばせないことを嘆かないのだ〉**などと訳すことができる。

「蛇足ながら、これは人間としての理想的な生き方を語ったもので、寿命を引き延ばせないという結果を思い悩まないで、無心・無欲になれない弱さを思い悩め」ということである。

#### ☑ 多義的な漢字の意味を文脈から適切に判断できたか

問四 「一茉莉也」の理解と、それ以下の部分の続き具合を、こなれた現代語に訳せるかどうかのポイント。

傍線部は、「一茉莉や、長洲の毎年買ふ所は、万株を下らずして皆死し、暁山の一株は、独り十年を歴て活く」と訓読する。「一茉莉也」の「一」を単純に「一株」という意味でとると、後で出てくる「万株」との対応がおかしくなってしまう。そこから、ここでは数量の単位ではなく、**〈同一〉**という意味で使われているとわかる。つまり、長洲の「万株」も暁山の「一株」も**〈同じジャスミンであるのに〉**となつて以下に続く。「万株を下らずして」は、**〈二万株以上も〉**のように言い換えるときよい。「独」は「ひとり」と訓読するが、基本的には「唯・只」などと同じ強調の副詞で、**〈ただ……だけ〉**のように訳す。そうすると傍線部は、**〈同じジャスミンなのに、長洲で毎年買うものは一万株以上がすべて一年で枯死し、暁山の一株だけが十年たつても生き続けている〉**という訳になる。

#### ☑ 文章全体の趣旨を押さえられたか

#### ☑ 漢文の典型的な展開を踏まえて読めたか

問五 傍線部は、「夫れ草木すら養ふを得ば尚ほ年を引くべし、況んや人をや」と訓読し、**〈そもそも、草木でさえきちんと養われればさらに寿命を延ばすことができる、まして人間ならなおさらである〉**という意味。**〈なおさら〉**どうなのか。もちろん、**〈なおさら寿命を延ばすことができる〉**というのである。では、草木にとつてはきちんと養うことができれば「引年」が可能となるが、人間の場合は、どのように自己を養えば「引年」できると言うのか。

文章全体の展開に戻って考えてみると、傍線部は「茉莉」の例と「引年」を結びつけた結論であり、「茉莉」の例はその前の㉒4〜6で語られた筆者の主張を補強する根拠でもあった。そこで、その部分の「若し清心の者、之を清くし又清くして、無心に至り、寡欲の者、之を寡くし又寡くして、無欲に至れば、豈に年を引く能はざるの理有らんや」に着目しよう。それによれば、**清心の者がとことん心を清くして無心に至り、寡欲の者がとことん欲を少なくして無欲に至る**。ここによって、初めて「引年」が実現する、というのである。「清心」から「無心」へ、「寡欲」から「無欲」へというのは、非常に厳しい自己修養であるが、そうなるまで初めて、「神仙に非ざれば能はず」と支簡亭が考えている「引年」が可能になる、というのである。

注意すべきなのは、「引年」の解釈が支簡亭と対溪・筆者とで分かれていることだ。主張文の場合、一般論や他の人の意見を否定した上で自説を展開するというパターンが多い。今回はまず対溪が支簡亭の

意見を一部分否定し、その対溪の意見に対して筆者が同意した上で、さらに自説を展開するという複雑な構成になっている。ここを読み誤らないようにしたい。

### 訓読

支簡亭謂へらく、「1年を引くは難し、但だ年を尽くすべきのみ。」

年を引くは、稟くる所の外に於て、引きて長くせんと欲す。神仙に非ざれば能はず。年を尽くすがときは、直だ是れ稟くる所の内に於て、中道にして天せず、期に至りて終はるのみ。此れ則ち清心寡欲の人にして之を能くす」と。余 此の言を以て対溪に語る。対溪曰はく、

「2年を引き年を尽くすは、二道有るに非ず。年は既に尽くすべく、之を尽くすは我に由るとせば、則ち亦た引くべく、引くも亦た我に由る」と。余曰はく、「誠に然り。若し清心の者、之を清くし又清くして、無心に至り、寡欲の者、之を寡くし又寡くして、無欲に至れば、豈に年を引く能はざるの理有らんや。3故に人は無心なる能はず、無欲なる能はざるを患へ、年を引く能はざるを患へず」と。蓋し余

長洲に官たりしとき、好事の家、福建の茉莉を買ひて玩と為すも、冬月に至る毎に、其の樹 枯死し、明年又買ふ。余 一日 寒山寺に至るに、其の僧の暁山なる者、茉莉一盆を出だす。花を開くこと数十朶なり。余問ふ、「此の花は今年買ひ得たる者か」と。暁山曰はく、「已に十年なり」と。4「茉莉や、長洲の毎年買ふ所は、万株を下らずして皆死し、暁山の一株は、独り十年を歴て活く。活きて数十年に至れるや、未だ知るべからざるなり。5夫れ草木すら養ふを得ば尚ほ年を引くべし、況んや人をや。」

### 全訳

支簡亭が言った、「1年を引き延ばすのは難しい。ただ年を尽くすことができるだけだ。年を引き延ばすというのは、(天から)受けた寿命の外へ、年を延ばして長くしようとするのである。(これは、)神仙でもないかぎり不可能である。年を尽くすというようなことは、ただ(天から)受けた寿命の内、途中で若死にせず、(定められた)時期に至って終わることだ。これなら、心が清く欲の少ない人ならで「きる」と。私はこの言葉を対溪に語った。(すると) 対溪は、「2年を引き延ばし、年を尽くすのに、二つの手段があるのではない。年は尽くすことができ、(また) 年を尽くすのは自分(の心がけ)によるとすれば、同じように(年を) 引き延ばすこともでき、(年を) 引き延ばすのもまた自分(の心がけ) によるのだ」と言った。私も、「まことにその通りだ。もし清い心の持ち主が、心を清くし、さらに清くして無心の状態になり、(また) 欲の少ない者が、欲を少なくし、さらに少なくして無欲の状態になるなら、どうして年を引き延ばせない道理があらうか。3だから、人は無心・無欲になれないことを憂え、寿命を引き延ばせないことを嘆かないのだ」と述べた。思うに、私が長洲で長官をしていたとき、好事家は福建産のジャスミンを買って愛玩していたが、冬になるたびにその木はみな枯死し、明くる年にまた買っていた。私がある日、寒山寺に行ったとき、その僧で暁山という者が、一鉢のジャスミンを出して見せた。数十個の花が咲いていた。私が「この花は今年買ったものですか」と尋ねると、暁山は「もう十年になります」と答えた。4同じジャスミンなのに、長洲(の好事家)

が毎年買うものは一万株以上がすべて枯死し、曉山の一株だけは十年たつても生き続けている。(今後、枯れるまで) 生きて何十年に至るかは、まだわからない。5 そもそも、草木でさえきちんと養われればさらに年を延ばすことができる。まして、人間ならなおさらである。

**まとめ**

- ・ 対比関係を押さえる
- ・ 解答要素を意識し、それぞれに適切な字数を割く
- ・ 対句表現に着目し省略された語を補つ
- ・ 句形や目的語といった文構造に着目する
- ・ 多義的な漢字の意味を文脈から適切に判断する
- ・ 文章全体の趣旨を押さえる
- ・ 漢文の典型的な展開を踏まえて読む